

日本の名作名文ハイライト

津軽

太宰治

朗読 wis

出所 ^声を便りにVオーディオブック

http://www.dl-market.com/default.php/manufacturers_id/1757/sort/6d

teabreak 編

津軽 太宰治

●本編冒頭部分

一 巡礼

「ね、なぜ旅に出るの？」

「苦しいからさ。」

「あなたの（苦しい）は、おきまりで、ちつとも信用できません。」

「正岡子規三十六、尾崎紅葉三十七、斎藤緑雨三十八、国木田独歩三十八、長塚節三十七、芥川龍之介三十六、嘉村礒多三十七。」

「それは、何の事なの？」

「あいつらの死んだとしさ。ばたばた死んでゐる。おれもそろそろ、そのとしだ。作家にとつて、これくらゐの年齢の時が、一ばん大事で、」

「さうして、苦しい時なの？」

「何を言つてやがる。ふざけちやいけない。お前にだつて、少しは、わかつてゐる筈だがね。もう、これ以上は言はん。言ふと、気障になる。おい、おれは旅に出るよ。」

私もいい加減にとしをとつたせゐるか、自分の気持の説明などは、気障な事のやうに思はれて、（しかも、それは、たいていありふれた文学的な虚飾なのだから）何も言ひたくないのである。

津軽の事を書いてみないか、と或る出版社の親しい編輯者に前から言はれてゐたし、私も生きてゐるうちに、いちど、自分の生れた地方の隅々まで見て置きたくて、或る年の春、乞食のやうな姿で東京を出発した。

● 最終部分

「何か、たべないか。」と私に言った。

「要らない。」と答えた。本当に、何もたべたくなかった。

「餅があるよ。」たけは、小屋の隅に片づけられてある重箱に手をかけた。

「いいんだ。食いたくないんだ。」

たけは軽く首肯いてそれ以上すすめようともせず、

「餅のほうでないんだものな。」と小声で言つて微笑んだ。三十年ちかく互いに消息がなくても、私の酒飲みをちゃんと察しているようである。不思議なものだ。私にやにやしていたら、たけは眉をひそめ、

「たばこも飲むなう。さつきから、立てつづけにふかしている。たけは、お前に本を読む事だば教えたけれども、たばこだの酒だのは、教えねきやなう。」と言つた。油断大敵のれいである。私は笑いを収めた。

私が真面目な顔になってしまったら、こんどは、たけのほうで笑い、立ち上って、

「竜神様の桜でも見に行くか。どう？」と私を誘った。

「ああ、行こう。」

私は、たけの後について掛小屋のうしろの砂山に登った。砂山には、スマレが咲いていた。背の低い藤の蔓も、這い拡がっている。たけは黙ってのぼって行く。私も何も言わず、ぶらぶら歩いてついて行った。砂山を登り切って、だらだら降りると竜神様の森があつて、その森の小路のところどころに八重桜が咲いている。たけは、突然、ぐいと片手をのばして八重桜の小枝を折り取って、歩きながらその枝の花をむしって地べたに投げ捨て、それから立ちどまって、勢いよく私のほうに向き直り、にわかには、堰を切ったみたいに能弁になった。

「久し振りだなあ。はじめは、わからなかった。金木の津島と、うちの子供は言ったが、まさかと思った。まさか、来てくれるとは思わなかった。小屋から出てお前の顔を見ても、わからなかった。修治だ、と言われて、あれ、と思ったら、それから、口がきけなくなった。運動会も何も見えなくなった。三十年ちかく、たけはお前に逢いたくて、逢えるかな、逢えないかな、とそればかり考えて暮していたのを、こんなにちゃんと大人になって、たけを見たくて、はるばると小泊までたずねて来てくれたかと思うと、ありがたいのだから、うれしいのだから、

かなしいのだから、そんな事は、どうでもいいじゃ、まあ、よく来たなあ、お前の家に奉公に行った時には、お前は、ぱたぱた歩いてはころび、ぱたぱた歩いてはころび、まだよく歩けなくて、ごはんの時には茶碗を持ってあちこち歩きまわって、庫の石段の下でごはんを食べるのが「ばん好きで、たけに昔噺語らせて、たけの顔をとつくと見ながら一匙ずつ養わせて、手かずもかかったが、愛ごくてなう、それがこんなにおとなになって、みな夢のようだ。金木へも、たまに行つたが、金木のまちを歩きながら、もしやお前がその辺に遊んでいないかと、お前と同じ年頃の男の子供をひとりひとり見て歩いたものだ。よく来たなあ。」と一語、一語、言つたびごとくに、手にしている桜の小枝の花を夢中で、むしり取っては捨て、むしり取っては捨てている。

「子供は？」たうとうその小枝もへし折つて捨て、両肘を張つてモンペをゆすり上げ、「子供は、幾人」

私は小路の傍の杉の木に軽く寄りかかつて、ひとりだ、と答えた。

「男？ 女？」

「女だ。」

「いくつ？」

次から次と矢継早に質問を發する。私はたけの、そのように強くて不慮な愛情のあらわし方に接して、ああ、私は、たけに似ているのだと思つた。きょうだい中で、私ひとり、粗野で、がらっぱちのこ

ろがあるのは、この悲しい育ての親の影響だったという事に気付いた。私は、この時はじめて、私の育ちの本質をはっきり知らされた。私は断じて、上品な育ちの男ではない。どうりで、金持ちの子供らしくないところがあった。見よ、私の忘れ得ぬ人は、青森におけるI君であり、五所川原における中畑さんであり、金木におけるアヤであり、そうして小泊におけるだけである。アヤは現在も私の家に住んでいるが、他の人たちも、そのむかし一度は、私の家にいた事がある人だ。私は、これらの人と友である。

さて、古聖人の獲麟を気取るわけでもないけれど、聖戦下の新津軽風土記も、作者のこの獲友の告白を以て、ひとまづペンをとどめて大過ないかと思はれる。まだまだ書きたい事が、あれこれとあったのだが、津軽の生きてゐる雰囲気は、以上でだいたい語り尽したようにも思はれる。私は虚飾を行はなかつた。読者をだましはしなかつた。さらば読者よ、命あらばまた他日。元気で行かう。絶望するな。では、失敬。